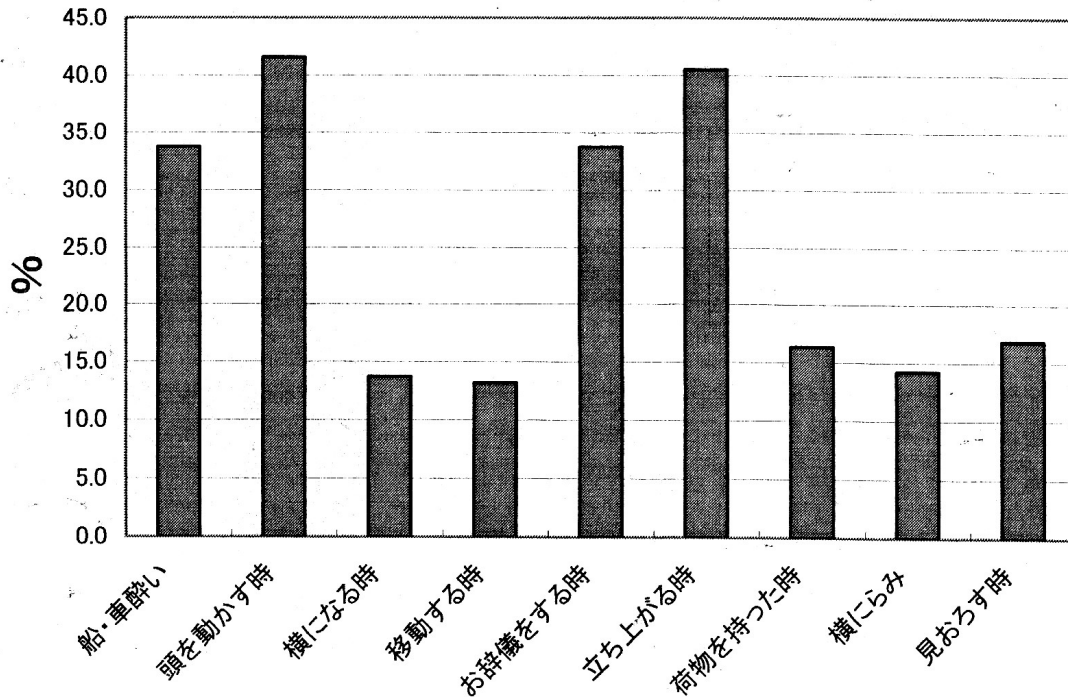


チェルノブイリのめまい

めまいのきっかけ



チェルノブイリの事故処理作業員たちの間に、いわゆる「原爆ぶらぶら病」のような症状が多く、それが原因で失業したり、アルコール中毒や自殺に追い込まれるなど深刻なケースも目立っている。ウクライナのコンスタンチン・トリナス医師は精神神経学的見地から、被曝者の調査を永年行ってきた。同医師の研究レポート「チェルノブイリのめまい」（1996年刊）を紹介する。対象は、事故処理作業員だった人、チェルノブイリ原発労働者、前プリピャチ住民、スラブジチ住民（注：事故後に作られた原発従業員のための新しい町）、キエフ住民など884名である。調査は前後1117回行われた。この中には、事故前の1984年と85年に検査を受けた人（対照：81人）も含まれる。これらの中で最も多い自覚症状は「めまい」であった。次いで多いのは脱力感や頭痛、不快感などである。通常一ヶ

月に一回程度のめまいは病的と言わないうが、これらの人々の場合、1から100回が最大で約50%に上り、これ以上の人も30%いる。めまいの持続時間も一回数秒から数分が最も多い（約40%）が、中には数時間から数日（10・20%）、さらに長い人（22%）もいる。トリナス医師によれば、このめまいはチェルノブイリ被災者に特徴的で、ある日突然はじまり、長く続き、頭痛や心臓病など他の病気を伴うことが多い。しかし、一般にめまいと関係が深い高血圧とは無関係である。汚染地域住民や事故処理作業員、原発労働者に多く、これらの人々にその後現れる様々な放射線障害の最初の兆候である。この「チェルノブイリのめまい」は汚染地域や事故処理作業員、原発労働者などの間で次第に増加しつつある。

（河田）